

## 繋がりや纏まりを生み出す《i.frame》の試み

小林茂 (Archival Archotyping, IAMAS)

本日は、今まさに開催中<sup>1</sup>のイベント「*iamas open\_house: 2021*」の会場およびそれを構成するフレームワークとしてつくった《i.frame》をご紹介しますところからお話していきたいと思います。

画面にご覧いただいているのが、今回の「*iamas open\_house: 2021*」の会場になります<sup>2</sup>。Webサイトにアクセスしたら、日本語と英語から使用する言語を選びます。続けて、ボイスチャットを全面的に採用していること、ボイスチャットへの参加の仕方、ボイスチャットと併用できるテキストチャットがあること、などの説明が表示されます。これらを確認したら、Code of Conduct＝心がけを確認、それに同意した上で自分のアバターを選んで入場するという構成になっています。

そうして入っていきますと、まさに今、この「メディア表現学会（仮称）」と「NxPC.Live」という別の音楽イベントが同時開催しており、画面の右側にはそれぞれのチャットにどのくらいの人が参加しているかが表示されています。ここから、この「メディア表現学会（仮称）」に入りますと、このシンポジウムがライヴストリーミングで流れていて、この右側のコラムに皆さんが集まっている状態が表示されます。これによって皆さんが一ヶ所に集まっていることを感じつつ、ボイスとテキストのチャットでやりとりもできるという仕組みをつくっております。

どうしてこういうものをつくろうと思ったのかを説明します。今回のイベント中ずっと展示されているもののなかに《i.frame》についての資料展示があります。オンライン・ホワイトボードの「Miro」を活用したものになっていて、最初に出てくるのは《i.frame》というものについての文章で、本イベントの説明文も掲示しています。このボードにはここに辿り着くまでがどうだったのかも説明してあります。遡りつつ、かいつまんで重要なところをお話していきたいと思います。

ちょうど1年くらい前に「IAMAS OPEN HOUSE 2020」（2020年7月23・24日開催）が開催されました。それまでは対面だったものをオンラインでの開催に変えたのですが、そ

のウェブサイトをつくっているうちに、どうもこれは今までのイベントのウェブサイトと違うなということに気づきました。これまでにつくられてきたのは、IAMASという施設を使って開催するイベントに対して、それを広報するためのウェブサイトでした。これに対して、ウェブサイト自体がイベントの会場になるというと全然考え方が違う、新しい文法が必要なんじゃないかということがわかってきたんです。考えてみれば、ウェブサイトに含まれる「サイト」は会場という意味も持つわけですが、一般的にはウェブサイトページをまとめて置いておく場所というふうに解釈されます。このウェブサイトという時の「サイト」という言葉をもう一度読み込んでいくと、いろいろ気づきがあるのではないかと、この時考えていました。

この時はまだその議論の途中のまま時間切れでイベント開催に至ったんですが、そこからいくつかの試行的なイベントをやり、その間にも参考になるようなことがありました。例えば、ゲンロンが運営するプラットフォームで「シラス」というものがあります。一見すると、既に動画配信のプラットフォームにはYouTubeやVimeoなどあるので、そうしたものでいいんじゃないかと思うんですが、自分たちが思い描く世界観を実現するためには独自のプラットフォームが必要だったんです。他にも、劇団ノーマーツの『それでも笑えれば』の公演——私は2020年を代表する演劇作品だと思っているんですけども——も2020年12月の末にありました。それと同時期に、私たちもオンラインで展覧会をやっていました。これはプロジェクトに参加している学生の作品を何点かインターネット上で公開するというもので、この時にまた新たに気づいたことがありました。どこかの美術館で展覧会を開催するには、色々なものを集めてきて、その会場で開催するわけですが、そもそもインターネット上で開催するなら、それらが一ヶ所に集まっている必要はないのではないかとということです。ですから、この時は同時多発的にインターネット上の様々な場所で開催し、それらを全体で展覧会と呼ぶということをしました。ただ、この時点では、先ほど岩城さんが紹

1 本イベントは、2021年7月22・23日の2日間に渡って開催された。

2 会期中のWebサイトの様子については、本イベントのレポート記事で確認できる。佐々木樹『「*iamas open\_house: 2021*」における共集性・一場所感の共有から距離感の測定へ』（2021年09月22日掲載）<https://www.iamas.ac.jp/report/iamas-oh2021/>

介された共集性の視点が抜けてしまっていて、みんな個別に見るだけで、そこに集まることもないし、何か全体で纏まりが生まれることもなく、その間に繋がりが生まれることもない。これはやはり考え直さなければいけないということで、その翌月に開催した時には、ひとつのウェブサイトにもそれらをまとめて見られるようにしました。ここで使ったのが、インラインフレームというウェブの技術です。これは、他のウェブサイトのあるページなどをそのまま自分のページに貼り込むことができるというものです。ですからインターネット上でバラバラに、それぞれの人、展示や作品が活動していることは変わりませんが、それらに枠を当てはめて、あたかも一ヶ所にあるように見せ、そこに繋がりとまとまりを生み出していくということにトライしたんです。このトライの当初は、今紹介している資料のように、ズームイン&ズームアウトしながら能動的にそれぞれを見ていくようなものというのを考えていました。ちょうどその頃、ボイスチャット——当時Clubhouseが日本でもかなり流行り始めた時でもありましたので——音声という、身体にかなり近いメディアを使っての、リアルタイムのコミュニケーションに、何かヒントがあるのではないかと考え、ボイスチャットを取り込んだ形で開催をしました。

そうしたものを経て、さらに2021年の3月31日には「メタ・モ（ニュ）メント2021」というイベントを行いました。この際に、インターネット上に展開されているいろいろなものに、ボイスチャットのようなレイヤーをかぶせ、それぞれバラバラになっているものが繋がりと纏まりをもって見ることができるよう体験をつくり出そうというところに到達しました。そういった試行錯誤を経まして、「i. frame open\_house: 2021」を、今回もオンラインで開催するとなった時に、松井茂さんから、そのプラットフォームとして《i.frame》を使ってはどうだろうという提案がありまして、これを受けて、この3月のイベントに使用したものを再構築して今回利用することになりました。

その際に大きく参照したのが、表象文化論学会の学会誌『表象』15号に掲載されている対談で岩城京子さんが紹介された「共集性」という概念です。私たちもそれまでいろいろと議論

を重ねてきたんですが、この共集性という概念で捉えると、かなり解像度が高まり議論に深みを与えることができるようになると思えました。

たまたまですが、『表象』15号の刊行と同時期に、サカナクションの山口一郎さんが、当初は対面で開催されるはずだったコンサートが延期になったため、自宅からライブを行っていました。こうした試みは、2020年、非常にたくさん起きてきたわけですが、そうした場において、今まで対面で行われていたようなもの——特に演劇の場合にはそうしたものが重要だと思うんですけど——に勝るものをこうしたオンライン、情報空間でつくるのはまだまだ難しいとは思いました。けれども、それらに加わる形で、上述したようなものが入ってくることはできるのではないかということが、こうしたイベントにおいても、メッセージとして発せられていたのではないのでしょうか。

私たちとしては、こうした情報空間における取り組みを試行しつつ、これらが今後当たり前になっていった時に、物理空間と情報空間の両方における様々な取り組みをうまく組み合わせるようなあり方を探っていきたいという思いから、この《i.frame》を提案するに至りました。

もともとインラインフレームの略は「iframe」で、これに対して《i.frame》とiのあとにドットをつけています。これは、そこに「インライン」以外の意味をもたせたいという考えからです。例えば「invisible」だったり、「inter」かもしれない。この見えない枠があることによって繋がりと纏まりが生まれているということを想像できるような名前にしようということで、《i.frame》と呼んでいます。言い忘れていたことがひとつありました。こうやって多くの人々が集まっているという時に、たくさん集まっているということは伝えたいけれども、それを数としては決して扱わないようにしようと、今回考えています。限られた表示スペースだと5人くらいの参加者を最初に出して、「他35名」みたいに表示してしまいがちなんですが、そういうことは一切しないとか、そんなことを徹底して取り組みながらつくったプラットフォームです。ということで、私からは以上簡単ではありましたが、《i.frame》についての説明でした<sup>3</sup>。